

した。抗体の投与方法により3群を作成し、A群は抗体非投与群、B群は心臓移植に用いた術前2日前より2回投与した群、C群は術前1日前より術後7日目まで9回投与した群。各群とも LEW 6匹、12 grafts 作成。術後1週での移植皮膚の浮腫の状態、拒絶されるまでの期間、発毛状態を観察した。

結果、術後1週での浮腫の状態はA、B群で著明にみられ、C群はどの例もごく軽度だった。拒絶されるまでの期間はA群は7日から12日、平均9.2日、B群は7日から21日、平均10.7日とA、B群間では有意差は認めず、C群では21日から98日、平均51.3日と有意に延長を認めた。C群で3匹6 grafts に良好な黒色毛の生育がみられた。

考察、白色の LEW に BN 色の黒色毛が発育したことは、移植した皮膚が生着した現象と考えられた。2回投与と9回投与の結果から生着しにくい組織の移植において抗体の投与回数は重要なカギを握ると考えられた。9回投与でばらつきが出た原因は、抗体を投与されたラット間での抗体の効果の個体差と考えた。最長でも12週で拒絶されてしまう理由は、皮膚組織の抗原の多様性、turnover に伴う抗原性の変化が考えられた。

行わずに生体腎移植を行うことができた。献腎移植の4例はいずれも10年以上の長期透析患者であり、最長例は透析歴27年であった。ABO 血液型不適合移植のうち1例は妻をドナーとした夫婦間移植を行った。1996年6月中旬までに施行された18例に対する移植腎生着率は88.9%で、促進性急性拒絶反応をおこした1例と術後肺結核を合併し免疫抑制療法を中止せざるを得なかった1例で、残念ながら移植腎機能の廃絶を認め、移植腎摘出を行った。また1995年4月には新潟市民病院にて献腎の提供があり、腎移植ネットワークを通じて群馬大学と北里大学に搬送され、各々生着している。

## II. 特別講演

### 「人工骨材料の開発とその臨床応用」

京都大学教授・大学院医学研究科・  
医学部感覚運動系病態学

中村孝志先生

#### 4) 新潟県における腎移植の現況

筒井 寿基・齋藤 和英	
片桐 明善・米山 健志	
若月 俊二・水澤 隆樹	
宮島 憲生・原 昇	
星井 達彦・谷川 俊貴	
武田 正之・高橋 公太	(新潟大学泌尿器科)
西 慎一・上野 光博	
成田 一衛・島田 久基	
荒川 正昭	(同 第二内科)
甲田 豊・清水 武昭	(信楽園病院)
平澤 由平	(腎センター)
石川 暢夫・唐仁原 全	(立川総合病院)
	(腎センター)
吉田 和清	(新潟市民病院)
	(腎膠原病科)

1995年から1996年6月末日まで新潟県内において生体腎移植15例、献腎移植4例、合計19例の腎移植が施行された。免疫抑制剤のタクロリムスと二重濾過式血漿交換が1996年4月に保険適応となったのにもない新潟大学泌尿器科にてABO血液型不適合移植を現在までに4例行った。レシピエントは男性13例、女性6例で平均年齢は33.9歳であった。ドナーは男性7例、女性12例で、平均年齢は50.5歳であった。急速に azotemia が進行した10歳の Alport 症候群例では術前血液透析を

#### 第54回新潟癌治療研究会

日 時 平成9年2月8日(土)  
午後1時30分～5時40分  
会 場 新潟東映ホテル  
2F 朱鷺の間

#### 一般演題

##### 1) 当科における上顎歯肉癌患者の臨床的検討

高田 真仁・芳澤 亨子  
野村 務・新垣 晋 (新潟大学歯学部口  
中島 民雄 (腔外科学第一講座)

1971年4月から1996年12月の25年9ヶ月間に当科を受診した上顎歯肉癌19症例について臨床的に検討を行った。初診年齢は38歳から83歳までで平均63歳であり、性別は男性11例、女性8例。T分類はT1, 2例, T2, 5例, T3, 4例, T4, 8例。N分類はN0, 11例, N1, 3例, N2b, 3例, N2c, 2例であり、M分類は全例M0であった。組織学的には全例扁平上皮癌であり、臨床病期については、Stage I が2例, Stage II が3例, Stage III が3例, Stage IV が11例であった。主たる治療と

して外科療法が行なわれたものは15例、放射線療法が行なわれたものは4例であり、予後は現在生存例が9例、死亡例が10例でそのうち2例は遠隔転移によるものであった。Kaplan-Meier法による5年累積生存率は58%であった。今回、上顎癌の頸部リンパ節転移経路および、原発巣再発様式に重点をおいて検討した。

## 2) 上顎扁平上皮癌一次症例についての臨床的検討

伊藤 英史・石原 修  
武田 幸彦・岡野 篤夫 (日本歯科大学新潟  
森 和久・土持 眞 (歯学部口腔外科学  
又賀 泉 第二講座)

上顎扁平上皮癌一次症例28症例の臨床的検討を行った。原発は上顎洞癌が16例、上顎歯肉癌が12例で、硬口蓋原発はなかった。男女比は上顎洞癌では3.7:1と男性が、また上顎歯肉癌では0.7:1と女性が多かった。初診時年齢は上顎洞癌が32歳から88歳平均61.1歳、上顎歯肉癌が45歳から79歳平均67.1歳と上顎洞癌に比較して年齢が高い傾向にあった。TNM分類では、T1:1例、T2:4例、T3:8例、T4:15例で、N0:21例、N1以上:7例であり、上顎歯肉癌において頸部リンパ節転移例が多かった。Stage分類でStage III、IV以上の進展症例は、上顎洞癌で15/16:93.8%、上顎歯肉癌では9/12:75.0%といずれも大半を占めていた。一次治療は、上顎洞癌でいわゆる三者併用療法が14/16:87.5%に、上顎歯肉癌では、7/12:58.3%に行われていた。5年累積生存率は、上顎洞癌32.1%、上顎歯肉癌35.0%であった。

## 3) 口腔領域における黒色病変 —悪性黒色腫3例と悪性黒子2例—

野村 裕行・星名 秀行  
鍛冶 昌孝・高木 律男 (新潟大学歯学部口  
大橋 靖 (腔外科学第二講座)  
鈴木 誠 (新潟大学歯学部附  
属病院臨床検査室)

悪性黒色腫:症例1;72歳,女性。初診:1980年10月17日。硬口蓋に黒色腫瘤を認め、T4 N0M0, Stage III (UICC, 1987)の診断にて、上顎骨部分切除術を施行し、術前、術後にN-CWS, PSK, DTIC, ACNU, VCRを投与した。術後8年、他病死した。

症例2;67歳,男性。初診:1995年11月2日。上顎歯肉に黒色腫瘤を認め、T4N1M0, Stage IIIの診断にて

て両側頸部郭清、上顎骨部分切除術、レーザー焼灼を施行。術前、術後にDAV, IFN-β療法を計5回行い、1年3カ月再発認めず。

症例3;73歳,男性。初診:1996年10月8日。硬口蓋と頬粘膜に黒色腫瘤を認め、T4N0M0, Stage IIIの診断にて、上顎骨、頬粘膜切除術を行い、術前後に、DAV, IFN-β療法を施行し、経過観察中。

悪性黒子:症例4;64歳,男性。初診:1991年9月6日。硬口蓋に黒色病変を認め、DAV, IFN-β療法後、腫瘍摘出術、レーザー焼灼を行い、5年3カ月経過し、再発認めず。

症例5;68歳女性。初診:1981年8月4日。口角に黒色病変を認め、N-CWSの投与後、腫瘍摘出術を施行した。15年経過し、再発なし。

## 4) 当院における過去11年間の上咽頭癌の放射線治療成績

笹本 龍太・斎藤 眞理  
椎名 真・清水 克英 (県立がんセンター  
小林 晋一 (新潟病院放射線科)  
長谷川 聡・大倉 隆弘 (同 耳鼻科)

はじめに:当院における過去11年間の上咽頭癌の放射線治療成績を集計したので報告する。

対象:対象は1985年から95年の11年間に当院で初回放射線治療を施行され、最低40Gy以上照射された上咽頭癌27例。Stage別ではIはみられず、IIが2例、IIIが3例、IVが22例。また化学療法併用群は20例、非併用群は7例であった。

結果:全体の5生率はover all survivalで55.5%、Stage IVだけでみるとover allで48.0%であった。Stage別、化学療法の有無等で5生率に差はなかった。再発例は12例で、Stage IIが2例、IIIが2例、IVが8例で、化学療法併用群が10例、非併用群が2例であった。

考察:当院における上咽頭癌の放射線治療成績は全体で5生率55.5%と、他施設の報告に比して同等であった。化学療法の有無で5生率に差はなかった。